九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

地域の特色を生かした体験活動の実践 : 地域との協働を通じて

伊東, 俊昭
大分県佐伯市宇目緑豊小学校

https://doi.org/10.15017/2556593

出版情報：生活体験学習研究. 18, pp.5-10, 2018-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第18号　5－10（2018）

地域の特色を生かした体験活動の実践

― 地域との協働を通じて ―

伊　東　俊　昭*

Elementary School Hands-on Activities That Take into Consideration Regional Characteristics

— A Regional Collaboration Perspective —

Ito Toshiaki*

要旨　将来、社会に出て、目標に向かい自信を持って生活していくために身に付けるべき基本的な生きる力として、自ら進んで挨拶ができることや人と意思疎通ができること、自分で考え行動する力を身に付けさせることや感性を磨くことが非常に重要である。そのために、より多くの人や自然、社会と関わりながら、児童が、意欲と主体性を持って取り組んだ結果として、達成感、成就感を味わわせることができる地域の特性を生かした取組を意図的・計画的に仕組んでいくべきであると考える。

キーワード　地域、教育の協働、体験活動、他校との交流

１．はじめに

本校は、大分県の南部に位置する佐伯市の中心部より西に車で30分ほどの山間部にある宇目に位置する。平成29年年６月14日に「祖母・傾・大崩山系」がユネスコ・エコパークに登録され、本校校区が登録エリアの中心地となる自然豊かな地域である。なお、本校は、平成29年４月現在児童数96人、７学級、職員数14人のへき地２級地の小規模校であり、本年度、統廃合により開校して８年目を迎える。

隣には、佐伯市立宇目緑豊中学校があり、開校以来、小中一貫教育を進めてきており、「自分の思いや考えを伝え合うことができる児童・生徒の育成」を研究主題として、連携・協力して研究を進めてきている。

学校の教育目標は、「ふるさとを愛し、豊かな心と学ぶ意欲を持ち、たくましく生きる宇目っ子の育成」である。重点目標として「学びに向かう力の育成」「互いを思いやり協働できる力の育成」「体を動かすことが好きな子どもの育成」の３つを挙げている。

２．児童の実態及び課題

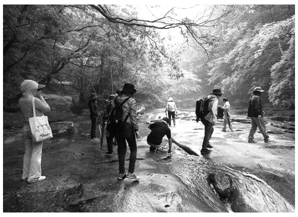
各種調査結果からは全体として自己肯定感が低く、自尊感情を高めるための取組が必要であり、自信につながるよりどころをつかませることが重要であると分析する。

また、児童は、保育園から中学校３年まで学級替えもなく、ほぼ変わらない仲間と過ごしてきているために、人間関係が固定化されている。そのためか、人との関わり方や社会性が十分身についていない傾向にある。特に、受け身の姿勢が見られることがよくあり、様々な体験学習を通して自ら進んで考え、行動する力を育むことが課題となる。

*大分県佐伯市宇目緑豊小学校
連絡先：〒879-3205　大分県佐伯市宇目大字千束2241番地
TEL 0972-52-5151　 FAX 0972-52-5152

３．体験活動等の充実に繋がる研修の実施

児童により身近で切実感、必要感のある課題をつかませ、具体的な手立てを示し、達成感・成就感を味わわせることができる体験活動を仕組むことも大切である。そのためには、まず、教師自らが、地域に興味・関心を持ち、地域の良さや課題に気づくところから始める必要があった。そこで、研修の中で、地域の自然や産業に触れる研修を２回行った。この研修により、社会科見学や自然体験活動などの充実に繋げられることをねらいとした。



４．地域の特性を生かした学校行事や体験活動の推進

体験活動が、より充実した教育内容となるように、恒例行事のような取組になりがちな活動の目的や内容について見直すことが必要である。児童が、真剣に考え、課題に気づき、解決するために、思いを伝え合い、解決方法を見つけ出し、取り組み、その結果と課題、感想などを表現できるところまで行うことや、準備と片付け、協力者への感謝の気持ちを伝えることろまでしっかりと行うことも大切である。特に、思考力や判断力を身につけさせるために体験活動を通じて、感性を磨くこともねらいとしている。

判断力を養うためには、意志決定の場面を保障する学校行事や体験活動の内容の充実を図る必要がある。児童により身近で切実感、必要感のある課題をつかませ、具体的な手立てを示すことで、１人１人がしっかりと考えながら深い学びへと繋げていくことができる学習を行うことにより、達成感・成就感を味わわせることができる取組を仕組むことが大事である。

①学校行事や体験活動の見直し

恒例行事のような取組になりがちな学校行事や体験活動の目的や内容について見直す必要がある。見直しの視点として、児童が、真剣に考え、課題に気づき、解決するために、思いを伝え合い、解決方法を見つけ、取り組み、その結果と課題、感想などを表現できるところまで行わせることが大事であること、準備と片付け、協力者への感謝の気持ちを伝えることまで行うことを再確認した。

ア　藤河内渓谷の自然観察会（４学年）

前年度の取組を振り返り、児童の主体的な学びとするために、専門家による活動前の説明を無くし、自分たちで見つけた植物や虫などについてデジタルカメラで撮影し、図鑑やインターネットで調べてまとめる取組とした。また、まとめたことについて、機会があれば様々な場面で発表することとした。

イ　稲作（５学年）

準備された稲を植え、稲刈りをするだけの取組から、苗を運んだり、草取りをしたり、片付けまで行うことで、苦労や大変さをより実感できる取組とした。

ウ　椎茸栽培（３学年・５学年）

３学年児童が、地域の方々の協力により、この３年間椎茸のコマ打ち体験を行ってきている。コマ打ちをして２年たった５学年児童のホダ木から椎茸が発生し、５学年児童が、収穫した椎茸を使って地域の方々の支援により郷土料理を調理し、試食した。

②　他機関との連携

関係機関の担当者から取組内容についてプレゼンテーションを行ってもらったり、情報提供したりする中で、担任が取組を希望した学年が取り組む方法で関係機関との連携を図ってきている。

ア　ユネスコ・エコパークに関連した取組

平成29年６月14日に、祖母・傾・大崩山系ユネスコ・エコパークが認定された。昨年度からその準備を重ねてきた宇目振興局と連携しながら、取組を行ってきた。特に、４学年児童は、藤河内渓谷へ行き自然観察を行ってきた。また、２学期からは、九州大学との連携により、４学年児童が、アサギマダラについて調査を行う準備を進めてきた。３学年児童は、ユネスコ・エコパーク内で営まれている産業である椎茸団地、花卉団地、森林組合、直売所を見学し、学習したことをまとめた。６学年児童は、藤河内渓谷でデーキャンプを行った。

１月に行われた地元の商工会が行った行事の中で４学年児童有志が、自分たちで学習してまとめたポスターを使って、藤河内渓谷について発表した。

３学年児童は、見学した産業などについてまとめたことをお互いに発表する時に、宇目振興局長と中学校校長にも参加していただき、感想を述べていただいた。振興局長は、児童が発表したことへの感想を述べるだけでなく、振興局の取組や関係することについての情報を児童に分かりやすく説明してくれたことで、学習を深めること、児童の興味関心を高めることに繋がった。

これらの活動を通して、地域の自然に興味関心を持ち、地域の良さに気づき、ユネスコ・エコパークの意義や地域創生ついて考えさせる機会とし、総合的な学習の時間をはじめとする教科・領域で達成感・成就感を味わわせることに繋げることができるようその基盤づくりとしての取組を模索してきている。

イ　県立美術館及び大分大学との連携による取組

平成28年度から県立美術館と大分大学との連携によって、２学年児童と４学年児童が、「地域の色・自分の色」事業として図工や総合的な学習の時間に取り組んできた。その成果物が佐伯市により作成された冊子の表紙に使われた。さらに、ユネスコ・エコパーク認定に係る県知事とのふれ合いトークに児童の代表２人が参加し、藤河内渓谷での自然観察会と「地域の色・自分の色」の取組について説明を行った。平成29年度、１学年から４学年の児童は、「超ぼあんぼあん」と題したワークショップを行ってもらった。空気を入れた大きなビニール袋を膨らませ空気を体で感じる体験だった。

３学年児童は、平成28年度から身近なところで様々な色探しを行ってきた。植物や石、虫など色に関係したものを「虹色ボックス」に保管してきている。２月には、これまで取り組んできた自分の色探しについてまとめたことを発表した。大分大学の２人の准教授が、その発表を聞いて、感想と科学的な補足説明を行ってくださった。

４学年児童は、藤河内渓谷での自然観察会で拾ってきた石を粉にしたものを使って絵の具をつくり、鳥や虫などの絵を描いた。

５学年児童は、学校の敷地内で採取した植物を使って、草木染めを行った。羊毛や絹糸を染めて、団子状のものを作った。昨年度から「地域の色・自分の色」に取り組んできているので、大分大学や県立美術館の先生方とも親しく活動に取り組めていた。担任の話によるといずれの取組も児童の自尊感情を

高めることに繋がる取組であり、教育課程に位置づけることができそうな取組であるとのことだった。

ウ　佐伯市及びとの連携による取組

佐伯市の担当、佐伯ケーブルテレビ、大分リコーの協力により５学年児童を対象として３Ｄプリンター及びドローンについての体験学習を行うことができた。

３学年児童は、佐伯市の担当者からの情報提供により大型ドローンの飛行実験の見学を行うことができた。このように、最先端技術に触れることも児童の興味関心を高め、社会で起きていることに気づかせ、理解させることにつながる良い学びの機会となっている。

エ　大分県貝類談話会の協力による学習

２人の先生をお迎えして、佐伯市宇目木浦にしか生息しないタケノコギセルという貝をはじめ、珍しい生きたカタツムリや様々な貝の標本を紹介していただいた。児童は、自分たちの地域にしか生息しない貝が存在することに驚いていた。

オ　大分県猟友会の協力によるキジの放鳥

全校児童の参加により、雄雌合わせて100羽のキジを放鳥した。キジを初めて目にする児童もおり、野鳥に興味を持たせることができた。その後地域でキジを見かけたと報告してくる児童もいた。地域の自然に目を向けるきっかけとなる取組の一つとなった。

③　他校との交流

主体的に総合的な学習の時間に取り組めるように、同じユネスコ・エコパークに関係する地域の２つの学校と交流を進めている。

ア　延岡市立北川小学校との交流

４学年児童は、北川ダム湖上・中流域交流事業として、北川小学校との交流学習を行ってきたが、昨年度からはユネスコ・エコパークを意識した取組としている。

イ　竹田市立祖峰小学校との交流

同じ「祖母・傾・大崩山系ユネスコ・エコパーク」に位置する学校との交流をすることで、相手を意識した総合的な学習の時間に発展させ、しっかりと目的意識を持たせ、より充実した学びにしていくために取り組んできている。特に、インターネットを活用した授業により、調べ学習してまとめたことを発表し合った。

④　環境整備

持続可能な教育実践のために、環境の整備を地域の協力の下に行ってきた。

ア　地域の支援による学級園の増設

宇目振興局の仲介により、佐伯広域森林組合から木材を提供していただき、学級担任からの要望があった学級園の増設を行った。材料を手に入れた後、事務職員を中心に、校長と教頭と３人で２か所設置した。

各学級とも、より多くの種類の野菜を栽培し収穫することで、児童に達成感・成就感を与えることをねらいとして取り組まれた。より充実した体験活動を行う環境を整備できた。

イ　地域の協力による教材の入手

竹馬づくりのための竹や図工で使う杉の木材等を手に入れるために校区コーディネーターや宇目振興局地域振興課の担当の協力を得た。得た情報をもとに桑の木の移植を行うことで、次年度から桑の葉を学校内で入手できるようにした。

ウ　インターネットを活用した他校との交流

インターネットを活用して、交流相手校の児童と調べ学習をしたことについて情報交換を行った。これまで総合的な学習の時間で取り組んできたことについてまとめたことを緊張感を持ってしっかり発表できていた。

エ　プログラミング教育に係る研修の実施

外部講師を２名招聘して、６学年児童を対象としたプログラミングを活用した算数の図形の授業を行っていただいた後、教員を対象とした研修を行った。

５．成果と課題

①　成果

児童が、地域素材や地域人材を生かした学習や体験活動を行うことで、地域の自然や人々、産業などに対して興味関心を高めつつある。とりわけ、ユネスコ・エコパークに関係した総合的な学習の時間や体験活動等を行うことで、児童の地域に対する興味関心を高めることができ、より身近な課題を意識した主体的な学習となりつつある。

また、県立美術館や大分大学、宇目振興局や九州大学と連携して様々な取組を行うことで、専門的で高度な学びを保障することができ、より主体的・対話的で深い学びにつながる取組となってきている。

上記の２つの取組については、それぞれの関係機関を結び付けることで、それぞれの取組が有機的に繋がり、より効果的な取組になるように調整できたため、今後もそれぞれの取組を関連づけながら総合的な学習の時間をはじめ各教科の授業内容の充実に繋がる教育実践として発展させたい。

また、多くの人たちと接しながら学ぶことで、挨拶や学習規律の向上が認められる。特に、人との関わりにより、適度な緊張感を持って自分の思いや考えを伝える機会を設定することで、思考力・判断力・表現力を高める取組となり、児童の自尊感情を高めることに繋がってきている。

３学年担任からは、「児童が主体的に考え、自分たちで課題を解決していこうとする姿が見られるようになりつつある。また、物事に気づき、より深く観察したり、考えたりする様子を目にする機会が増えた。それは、様々な体験活動をしたり、本物に接する機会が増えたからではないかと思う。」という話が聞けた。

とりわけ、４学年児童の竹田市祖峰小学校や延岡市立北川小学校との交流により、目的意識と相手意識を持って、調べ習や問題解決学習に進んで取り組む姿が見られつつある。秋田県横手市立十文字第一小学校とのインターネットによる情報交換は、これからの可能性を広げるものとなった。

教職員が、地域素材や地域人材を生かした授業や体験活動を行うことで、教育内容が充実し、児童の学習意欲が高まることが再認識でき、地域素材や地域人材を生かした教育実践への意識の高まりが認められる。さらに、それらの取組が、地域の活性化に繋がる可能性も見えてきた。

②　課題

学校と家庭、地域との連携・協力による教育の協働への意識と取組の温度差を解消するには、地域協育推進担当と校区コーディネーターが積極的に連携・協力して取り組んでいける体制づくりを進めることが急務であり、そのための人材育成が課題である。

また、地域素材や地域人材を生かした教育実践を行うためには、取組の成果に関する情報の共有と効率的な打合せや準備による職員の負担感の軽減が必要である。

さらに、効果的な取組を整理し、教育課程に位置づけ、計画的・継続的に学校の特徴的な取組として継続・進化させていくことが課題となる。

人との関わりについては、国語や算数などの教科学習においても、学習支援ボランティアの支援を日常的に活用することで、児童が地域のより多くの人たちと交流でき、人との関係づくりの学習の機会とできる。

今後も、体験活動を充実させることで、児童と職員が、夢や希望を語り、取り組める教育実践を創造していきたい。